

南足柄市立岡本中学校

研究テーマ：主体的に学習に取り組む態度の育成を図る授業の工夫・改善
～生徒の学習意欲を高める教材研究を通して～

1、実践の目的

本年度の本校の教育目標は「家庭・地域と共に育む 自立・共生・貢献 ～社会で活躍する人材の育成～」である。知・徳・体・意欲のバランスのとれた生徒（自立）、多様性を尊重し、協働して自己を最大限に発揮できる生徒（共生）、自分のよさを生かし、社会や人のために力を尽くすことができる生徒（貢献）の育成を目指すために、「目指す学習者像」を「学び合う生徒」とし、自ら学びに向かい、学び続けることができる生徒の育成を目指したいと考えた。

また令和3年度の学習に関する意識調査において、「自ら進んで学習に取り組んでいる」と回答した生徒は7割にとどまった。このような現状を踏まえて、生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指して、ねらいが明確な授業やそのねらいを生かす教材研究を進める必要があると考えた。

以上のような点から、今年度の研究テーマを「主体的に学習に取り組む態度の育成を図る授業の工夫・改善～生徒の学習意欲を高める教材研究を通して～」とした。

2、実践の内容

(1) 生徒の学習意欲を高める教材研究

(i) ICT機器の活用

技術科においては、Google Formsを使ったアンケートを行った。アンケートを授業のはじめと終わりに実施し、生徒の作業の状況や、困り感を把握す

る質問項目を加え、個別支援の充実を図った。これにより、生徒は安心感をもって授業に取り組むことができ、学習意欲の向上につながった。

理科では Google Jamboard を使って意見の共有を行い、学習を深める取り組みを行った。Google Jamboard を使用することによって、意見を生徒同士で共有しやすくなるとともに、机間指導で話し合いの様子を確認するよりも教師が支援に入りやすくなり、生徒の意欲の向上を図ることができた。

(ii) 問いや課題の設定

英語科では「今度京都を訪れる予定のAL Tに対して、おすすめの場所を提案する」という単元の課題を設定した。AL Tからのビデオメッセージを視聴して、生徒は「何のために」「誰に対して」「どんな」英作文を作るかを具体的なイメージとともに理解して学習に取り組むことができ、学習意欲の向上につながった。

(iii) 振り返りの充実

社会科では、毎時間の振り返りとは別に、単元の冒頭に提示する単元課題に対する自分の考えが授業前から授業を受けて変化した部分を記入できるように工夫をした。これにより、毎時間の授業のまとめを踏まえながら、学びの自己調整の過程を認識できるようになり、より学習を深めることができた。

また「社会科の学習の手引き」を作成し、生徒が適切にふり返りをできるように支援した。その結果、これまで学習に対して消極的だった生徒が少しずつ自己の学習をまとめることができるようになった。

◇授業を通して、自分の関心はどのように変わりましたか？深化シートをもとに確認しよう

この単元目標を解決するために必要なスキル	単元の授業を終えての反省・新たな気づき
<p>＜体験＞ 自己とフランスの友好記念にもなるし、フランス人が京都に興味をもつ、評やあることが解くことが出来るから</p> <p>＜追加・整理＞ 京都とフランスの文化が似ていて、橋を架ける場所、神戸の歴史、京都と並ぶ外国人の関わり、文化の交流、異文化の交流、京都の発展、橋を架けるの仕方</p> <p>単元シート ① 京都にフランス人の橋とてびが</p>	<p>最初は、京都にフットボールがなかった。『友好関係』という言葉だけに目がいき、京都の町にフットボールが咲き出した。授業を通して京都の和とフットボール、神戸の外国人との関わりを知り、橋を架けるのは神戸がいいという意見に振りまわされた。京都の歴史にそって、橋を架けるなら、良いと思う。</p>

学びの自己調整の過程を記入するふり返り

(2) 校内研究の推進

(i) 学び合い「皆議（かいぎ）」の設定

毎月の職員会議の後に教材研究情報の共有や、各教科の取り組みを発表する学び合い皆議を行った。「いつでも気軽に、フランクに、困ったことがあればすぐに質問し合える雰囲気づくり」を目指してポスターセッションなども取り入れながら継続的に実施した。

(ii) 研究推進のためのICT機器の活用

研究授業・公開授業のあとに行う研究協議でGoogle Jamboardを活用した。授業の写真、生徒の様子をJamboardに書き込むことができ、参観者がリアルタイムで感じたことを共有できる利点があり、どの研究授業・公開授業でも有意義な研究協議を行うことができた。

3、実践の成果

令和4年度4月に実施した全国学力・学習状況調査において、「授業の中でPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか」の項目で、本校の生徒は「ほぼ

毎日」が69.7%、「週3回以上」が22.9%回答している。この結果を合わせてみると92.6%の生徒が週の半分以上は何らかの形でICT機器を使用して授業を受けていることが分かり、本校の「ICT機器の活用」が進んできたことが分かる。

また、令和4年度7月に実施した「学習に関するアンケート」の結果より、「授業の中でICT機器を活用することで、学習内容の理解が深まっている」の項目の肯定的回答も、各教科で平均80%前後の高い割合で推移しており、授業内でICT機器を活用したことにより、生徒の学習内容の理解が進んだことが分かった。

4、今後の展開

ICT機器は視覚・聴覚に訴えかける教材の提示や、素早い意見共有、生徒の状況把握などにおいて効果的だが、研究授業のふり返り等を見てみると、ICT機器を使うことが目的となりやすく、そこに気をつけて使わないといけないという意見が多数指摘された。今後は、生徒に何を身につけさせたいのかを明確にしてICT機器を使う授業づくりを学校全体で進めていきたい。

また、先述の通り「問いや課題の設定」、「ふり返りの充実」を意識して設定することで、生徒の主体的な記述が増えてきたが、一方でこの主体的な記述内容をどのように見取り、評価していくのが難しい、という職員の声も多く寄せられた。特に、単元(教材)を通しての生徒の記述の変容を見取るのが難しく、各教科の特性からも悩みは多岐に渡っていた。この「主体的に学習に取り組む態度」の項目の評価の仕方をどのように工夫するか、その認識を学校全体で共有し、統一していく必要がある、これは今後の校内研究の大きな課題である。